

博士論文審査結果報告書（審査要旨）

専攻分野	博士（教育）
論文審査対象者	学籍番号 20172004 氏名 藤井淳子
論文題目	「航空自衛隊レジリエンス・トレーニング」に関する研究 —新しい「包括的アサーション・トレーニング」の開発と効果の検証—
論文審査委員	委員長 星槎大学大学院 教授 児玉ゆう子 委員 星槎大学大学院 教授 仁平義明 委員 星槎大学大学院 教授 三田地真実 委員 星槎大学大学院 教授 細田満和子 委員 東北大学大学院 教授 阿部恒之
審査の概要	<p>本論文は、自衛隊員が経験する可能性がある、多様で強い持続的ストレスによる心理社会的影響を事前に予防する、あるいはそのネガティブな影響から回復するためのメンタルヘルス方策、すなわちレジリエンス（心の回復）の方策として2017年に導入された「航空自衛隊レジリエンス・トレーニング」の効果の検証を初めて行い、さらにトレーニング・プログラム改訂のために実証的な検討を重ね、今後のレジリエンス・トレーニングの改訂を方向付ける研究をまとめ、総合的な考察を行ったものである。論文は第Ⅰ部の理論的検討編と第Ⅱ部の実証的研究編、第Ⅲ部の総合考察と結論から構成されているが、特に実証的研究の最終段階として行われた、新しい「包括的アサーション・トレーニング」の開発は、自衛隊員のメンタルヘルス方策の改訂への貢献にとどまらず、今後わが国のアサーション・トレーニングを一新させるであろう成果を示したものになっている。</p> <p>論者は、まず第Ⅰ部で、レジリエンス・トレーニングに関連する概念、ストレス、トラウマ、レジリエンスについての整理を行い、「レジリエンス」の過程には、信頼できる他者の存在つまり「社会的対人要因」が重要であることを確認した。これらの知見をもとに、アメリカ空軍のレジリエンス・トレーニングをベースにして導入されていた「航空自衛隊レジリエンス・トレーニング」の理論的背景について、心理学的に、さらには自衛隊の組織特性を考慮した理論的検討がされた。その結果、各国の軍隊と自衛隊のストレスの特徴を比較すると、戦闘ストレスがほとんど想定されない「航空自衛隊レジリエンス・トレーニング」では、社会対人的要因が重視すべきターゲットであること、およびそれらを促進するための「社会的レジリエンス」モジュールに意義があることが明らかにされた。また、航空自衛隊では社会対人的要因に関するレジリエンスの緩衝・促進要因である「凝集性意識」にはポジティブな要素としてワーク・エンゲイジメントがあり、「仲間貢献」、とりわけ「社会貢献」に関する高い労働価値観が介在していることが明ら</p>

かにされた。これらをもとに、航空自衛隊でのレジリエンスとは何か、定義および課題が明確化され、「航空自衛隊レジリエンス・トレーニング」に関する研究の方向づけがなされた。さらに、こうした整理に基づいて、次の第Ⅱ部の実証的な研究に向けては、「レジリエンス・トレーニング」の中でも「アサーション・トレーニング」に焦点を絞った研究の課題設定がされることになった。

実証研究編である第Ⅱ部では、まず、組織同一視、労働価値観、ワーク・エンゲイジメントの尺度で構成された質問紙調査及びインタビュー調査を通して、航空自衛隊のメンタルヘルスの特殊緩衝・促進要因である「凝集性意識」の発展には「同僚貢献」、「社会貢献」が寄与していることが確認された。

これに続く第2の実証研究では、2017年の導入以来、効果の検証がないままに実施されてきた「自衛隊レジリエンス・トレーニング」の効果検証が初めて行われた。その結果、トレーニング全体の効果は限定的であるが、「社会的レジリエンス」モジュールで有意な中程度の効果量がみられることが確認され、現行の航空自衛隊レジリエンス・トレーニング・プログラムの改訂に際しては、まず「社会的レジリエンス」モジュールに焦点を置くことが効率的であることが示唆された。この成果は、一般社団法人「日本防衛衛生学会」の学会誌『防衛衛生』第69巻 第5・6号（2022）に原著論文として掲載され、令和4年度の優秀論文賞（優秀論文発表者顕彰）の対象となる評価を受けている。

第3段階の実証研究では、「社会的レジリエンス」モジュールの中核になっている「アサーション・トレーニング」の新たな方向性についての検討がされ、新たな「包括的アサーション・トレーニング」プログラムの開発が行われた。

従来わが国で行われてきた「アサーション・トレーニング」は、数十年来、要求や反対の意志を表出する「対抗的アサーション」だけをほとんどターゲットにした偏りのあるトレーニングになっていた。しかし、本研究での新しいプログラムでは、好感や賞賛を表出する「賞賛的アサーション」と「対抗的アサーション」の双方のバランスのとれたトレーニングから構成され、研修後も日常生活の中で引き続きトレーニングを継続するための方法およびセルフモニタリングを新たに取り入れるなどの方策がとられた。また、プログラムの効果を測定するために作成された「包括的アサーティブネス尺度」他の指標を用いて、トレーニング・プログラムの効果の検証が行われた。結果では、新しいプログラムの有効性が「包括的アサーティブネス尺度」やメンタルヘルス尺度等の指標から確認されただけでなく、対抗的アサーションのトレーニングの効果は賞賛的アサーションのトレーニングにリードされる順次性がみられるなど、トレーニング効果があらわれるプロセスが詳細に明らかにされた。また、副次的な結果として、「包括的アサーティブネス尺度」の開発に際して実施した調査においては、航空自衛隊内のコミュニケーションは、決してトップダウン一辺倒ではなく、曹官クラスの間層の隊員が上部にも部下にも積極的に対抗的アサーションを行い、尉官・佐官クラスの幹部隊員は賞賛的アサーションによって隊員間の相互作用とメンタルヘルスを促進する役割を

果たしている「ミドルアップ・ミドルダウン」構造を持っていることが明らかにされた。さらには、日常生活の中で継続的にアサーションを実践することで、アサーションの対象が増えることが確認され、アサーション・トレーニングの受講が、隊内（職場内）から家庭、社会にまでも波及し、広いメンタルヘルスの促進効果も期待できると論者は結論づけた。この内容は「産業・組織心理学会」第37回大会（2022）で発表され、「優秀学会発表賞」としての評価を受けている。

第Ⅲ部では、以上のような知見に基づいて、航空自衛隊のレジリエンス・トレーニング、包括的アサーション・トレーニングの今後の展望について総合的な考察が行われた。

特に、アサーション・トレーニングについて、論者は、対抗的アサーションと賞賛的アサーションのバランスがとれた「包括的アサーション・トレーニング」が、隊内での信頼や協力の起こりやすさ、ネットワークの構築・広がりといった社会関係資本の蓄積を通じた組織的レジリエンスの向上につながるだけでなく、般化効果によって隊員の家庭や広く社会との相互作用を促進しうると結論づけた。この「包括的アサーション・トレーニング」の研究は、自衛隊以外の組織や教育現場など社会的汎用性を持つトレーニングであり、わが国の臨床界における今後のアサーション・トレーニングの実践を一変させるであろうと推測される。

しかし、論者は、「航空自衛隊レジリエンス・トレーニング」全体に関しては、自衛隊では「高強度ストレス」対策が未着手であり、「航空自衛隊レジリエンス・トレーニング」には、4つのモジュールとそれぞれのモジュール内に合計17の項目が含まれており、全体の改訂は今後の課題として残されるとしている。また、本研究の対象者は4万人を超える航空自衛隊組織のごく一部であり、航空自衛隊の他の部隊においても検証を進める必要があること、陸・海・空で構成される自衛隊、それぞれの組織固有の特性に応じたトレーニングの開発が望まれること、さらには、これらの課題の規模の大きさを考えると、今後のトレーニングの改訂は、自衛隊の組織全体で取り組むことが期待されるとしている。

最後に付言すれば、本論文の提出者は、組織の中で構成員のメンタルヘルス増進のために心理士として勤務する者であり、「レジリエンス・トレーナー」として「航空自衛隊レジリエンス・トレーニング」を担当してきた実践経験の中から研究課題をとりあげ、まったく新しい研究上の知見を生み出し、新しい方法の実践上の有効性を提示している。その意味で、本論文は「理論と実践の往還」という教育-研究上の精神を研究という形で体現したものと位置づけられよう。

審査結果

審査の概要の通り、本論文はレジリエンス・トレーニング、特にアサーション・トレーニングの研究分野に新たな理論的展望を与えるとともに、実践上も画期的な示唆をもたらしたものであり、当該分野の研究・実践の発展に寄与するところが大きい。

本論文の提出者は、本学大学院教育学研究科教授会が選定した委員が実施した博士論文審査および最終試験に合格し、博士（教育）の学位を授与されるに十分な資格を有する者と認められる。